劇場便り３２

ブレーマーハーフェン　　志賀トニオ

写真は「魔弾の射手」の舞台から

ブレマーハーフェン市立歌劇場では、１２月にウェーバー作曲の魔弾の射手、２月にオッフェンバック作曲の天国と地獄のプレミエがありました。私はそれぞれの演目を代振りする予定ですので、立ち稽古でピアノを弾くだけでなく、本指揮者がいないときには指揮も振りました。日本では代振りというと、病気になった指揮者の代わりにコンサートを指揮するイメージですが、ドイツでは演目ごとに本指揮者に加えて第２指揮者をあらかじめ決めておく事が多く、本番を振る回数を分担しています。その理由は、一演目ごとの本番の回数が多いからだと思います。ミュージカルは２０回、オペレッタは１５回、オペラは８回前後の本番がありますから、二人指揮者を配置しておいた方が仕事上融通が利くのです。オーケストラでも、同じような事が行われ、本番によって奏者が入れ替わります。ですので、指揮者がオーケストラピットを歩いて指揮台に立つまでにする最初の仕事は、実は"今日の奏者が誰か"を確認する事なのです。コンサートマスターも必ず２人以上で分担しますから、その日誰が演奏するかによって想像以上に変わるものです。そしてこのシステムこそが若手指揮者にとっては最大のチャンスとなるのです。私の場合、今まで多くのミュージカルとオペレッタの代振りをしてきましたが、オペラの代振りのチャンスはもらえていませんでした。３年前にカヴァレリア・ルスティカーナ/パリアッチというイタリア物のオペラ公演で音楽監督が病気になり、急遽私が振る事になりました。本来であれば、音楽監督の作品を私の立場で引き受ける事はないのですが、この時は大抜擢となりました。そして今シーズンはようやく正式にオペラ（魔弾の射手）の第２指揮者として抜擢されたのです。

魔弾の射手はドイツ人にとって特別な作品です。日本ではベートーベンのオペラ"フィデリオ"と並ぶ不人気の作品ですが、ドイツではこれぞ最初の正真正銘のドイツオペラであると見なされており、その作品を指揮出来る事は大変な誇りです。振り返れば、私がドイツの音大の指揮科を受験すると決めて最初に取り組んだのが、魔笛の夜の女王のアリアと魔弾の射手のアガーテのアリアでした。当時ミュンヘン音大教授だったブルーノ・ヴァイルさんの勧めでした。その後こちらもミュンヘン音大の講師だった方のプロダクションで魔弾の射手のコレペティトアを務める事になり、この時はコレペティトアは私一人であった為、全ての稽古を私が担当しました。このプロダクションはミュンヘン郊外の森の中で上演され、森の中にホルンが鳴り響くという、これ以上ないロケーションでした。

その後ブレマーハーフェン市立歌劇場に来て１年目に魔弾の射手をやる事になりました。その時の音楽監督はテツラフ兄弟の長男で、とても実力のある方でした。テツラフ兄弟といえば、バイオリニストのクリスティアンと、チェリストのターニヤが世界的奏者なのですが、長男のシュテファンさんが音楽監督の時は、その二人も定期演奏会の時にソリストとして弾きに来ていました。この時の魔弾の射手は同僚のコレペティトアが病気になった為、またしてもすべての稽古を私が弾くことに。この時の演出家は毎日８時間、時間いっぱい稽古する方だったので、へとへとになりました。この時はさすがにこれだけ沢山稽古で弾き、曲の事を知り尽くしてきたので、指揮をしてみたいという思いが強くなってきました。音楽監督の作品だから難しいと思いながらも、思い切ってシュテファン・テツラフさんにその希望を伝えました。しかし、残念ながら当時はそのチャンスはもらえませんでした。

そして今回、私にとって３回目の魔弾の射手。シーズンが始まって早々の会議で現音楽監督から代振りの話を頂きました。２月２６日と３月１日の公演を振る予定です。